

一年を通しての山荘生活は季節の変化に富み、街暮らしと違って自然と向き合っていることを常に実感させられます。私も清水高原に通って早二十数年になりましたが、数日の滞在では非日常を満喫するばかりで、日々の微妙な変化は分かりません。おそらく定住すればもっと日々の変化を感じることができると思います。



人生を60年近く過ごし様々な経験、人との関係などにひと区切りつ <スノーシュー>

け、山の生活に入るのもいいかなと思いつているこの頃ですが、思い通りになるかどうかは分かりません。おそらく生活の大部分が薪づくりの日々に費やされるのではないのでしょうか。

さて、清水高原も11月に入ると水道のサーモスタットが作動し熱湯が出てきます。また、曇りがちの空からは風花が舞うこともあります。そしていよいよ雪が降り始め、うっすらとした雪化粧がいつの間にか厚化粧になり長い冬に閉ざされていきます。車の冬支度、薪の備蓄はある程度済ませておかねばなりません。冬の朝日に舞うダイヤモンドダスト、雪上に残る山の住人たちの足跡の数々、歩くスキーとスノーシューを履いての山野巡り、こどもが小さいときは、近所のNさんとそり遊びにかまくら作り、薪ストーブの中で揺れる炎と薬罐の湯気、鍋料理に熱燗、夜の梢には満天の星屑、冬ならではの楽しみ方、過ごし方がふんだんにあります。そして本題のスノーシューについて思うことは、冬の行動範囲を広げ、銀世界を満喫する格好の道具の一つということです。

雪国の生活に輪かんじきは必要不可欠な歩く道具でしたが、近年、西洋かんじきとも言うべきスノーシューは、アウトドアの楽しみ方の一つとして山野を自在に歩き巡るのにもってこいの魅力ある道具です。スノーシューズを履いたまま装着し、長めのストックを持って新雪でも春先の雪上でも闊歩できる楽しさは格別です。雪上に道はありません、自分で道を引いていくのです。迷ったような自分のつけた足跡を振り返って見るのも一興です。静寂と樹木の冬芽、雪上の自然観察をしながら新たな発見に興奮することもあります。

雪が降る中、耳をすませば雪の舞う音、吹き付ける音、日頃耳にすることのない自然の音が聞こえてきます。多少の急斜面も滑り止めの爪を効かせて上り下りするうちに汗が滲んできます。歩くこつも自ずと身に付き自在になるに従って楽しさも増していきます。ただし、経験からすれば厚着のし過ぎは汗だくになってしまいますので程々に調整できるぐらいがいいと思います。

歩き終わって汗をかいいたらまずは着替えることが必要です。気分爽快、ビールで喉を潤すのもいいし、甘いものを食べるのもいいです。車に乗り、道を歩く生活に慣れているので、雪上を自分の意のままに歩くと開放感が一気に広がります。清水高原でスノーシュー散策に適したゲレンデは、展望台への道(展望台直下は急坂で難所)、桂の泉から先の林道、旧電波塔への導入路などがあります。

積雪が1メートル前後の新雪になるとかなり体力を消耗するため両ストックで体を支える必要があります。春先の圧縮された雪面では、また違った軽快感が味わえます。足を延ばせば野麦峠、乗鞍高原方面にも広々としたゲレンデがあります。



今は、清水高原を舞う雪が待ち遠しい。雪見酒も。